

牧田(金山)らく(数学者、1888—1977)―妻としての選択―

東京大学男女共同参画オフィス特任教授・女性研究者支援コーディネーター 都河 明子

牧田らくは、初めて東北帝国大学理科大学に入学した女性三人のうちの一人である。帝大卒業後の彼女の歩みは対照的であった。化学専攻の黒田チカと丹下ウメは生涯独身を遁れ化学の道に専心したが、らくは大好きな数学をあきらめ、東京女子高等師範学校教授の職も辞して洋画家金山平三夫人として生きる道を選んだ。

女性科学者が抱えるジレンマは今日もなお変わらないことを痛感する。

一 数学者をめざして

らくは一八八八(明治二十一年)京都市下京区で呉服の仲買人の次女として誕生した。らくは東京女子高等師範学校に入学すると、数学講師で東北大学林鶴一教授に才能を認められ、さらに東北帝大に進学することになった。らくは、

「私は、学校の勧めで黒田先生と仙台へ出掛けました。大学近くの東二番丁にあった坂医院の三人姉妹が女高師卒業生という縁で、

奥さまの経営する幼稚園の二階に下宿しました。大学もできたばかりなので、先生方も張り切っておられるし、わたしたちも寄るたびに、問題を解いたり…勉強、勉強でした。」

「なにしろ、先生から『金はいくらでもあるから、読みたい参考書をどんどんいって来てたまえ』といわれ、好きな本を図書室に備えてもらいました」

と回想している(『読売新聞』昭和四十四年十月二十五日付)。

黒田チカは「牧田氏とは数年間寝食を共にしたと申したいのであるが、共通な物はお風呂と食事と本多光太郎先生の物理学通論を同講義室で承ったことぐらい、その他の点は随分異なつたものであった。即ち化学では毎日実験でおそく帰るので夕食のころ牧田氏は就寝のことが多かった。牧田氏は、午後まで大学にいられるのが少なく宅で勉強したり散歩に行かれたようであるが、その道すがら数学の問題を考えるのが楽しみて、往來で出会う人の顔などとは見ないと話された。試験が近

雑事に煩わされるのは困る、作家として制作の障害になるような環境に身を置くことはできないという考えであった。

一方、らくは大学を出てまだ一年も経っておらず、研究を捨ててはせっかく女子に門戸を開いてくれた東北大学にも、委託学生として送り出してくれた東京女高師に対しても申しわけが立たず、後輩の教育に尽くさねばならない立場であった。

紆余曲折の末、二人が結婚式を挙げたのは一九一九(大正八)年、平三三十五歳、らく三十一歳であった。結婚後は小石川大塚坂下町に家を借りて新居を構えたが、平三は東京、写生のために出かける旅先、制作のために籠る神戸の実家のアトリエを行ったり来たりする不規則な生活を余儀なくされていた。

このような状況のなか、らくは結婚後一年間は仕事を続けたが、東京女高師を退職した。退職少し前には東京女高師教授に任ぜられていた。

三 数学への執着

金山の後輩で、親友でもある伊原宇三郎は「夫人は、その専門に対しても強い自信があり、結婚後も家庭で研究を続けるつもりであった。私が大正十四年春パリへ行った時、パリで探してほしいと、四、五冊の専門書の購入を頼まれた。本屋へ行ってそのリストを見せると、書店主が肝をつぶし「貴方は、こんなむずかしいものを研究していただけるのですか」と言う。「イヤ、知人の奥さんだ」と答

えると、更に驚き、「日本にそんな偉い女の人が居るのですか」というようなことがあった」と述べている。

数学は家庭でもできると考えていたが、深い思索に時間をとられる研究を続けるのは到底無理だと気づいたら、専門書を取り寄せては一冊一冊読破し、文献目録を作ること考えた。恩師林教授と連絡をとりながら、一九三三(昭和八)年『東北数学雑誌』に「Linkage二関スル著作ノ目録」を発表した。この雑誌はわが国における初めての国際的な数学専門雑誌で、諸外国にも送られていた。彼女の論文をみたドイツの数学者ワイス(E.A.Weiss)から大変参考になったという礼状と著書が送られてきたという。また、この論文は世界的な数学雑誌Mathematische Zeitschriftにも詳しく紹介された。

四 金山平三夫人としての半生

金山平三は孤高の画家といわれる。後世の評価に耐える作品を残すことを理想とし、その理想を実現するために、日常生活の困苦に耐えながら、画業の自由をことごとく追求した。フランスへの留学の際、恩師の黒田清輝は官費留学生となることを勧めたが、帰国後義務にしばられることを嫌って辞退した。らくと結婚したころは、文展で連続特選をし、文展審査員もつとめたが、一九三五年の文展改組に反対し官展と縁を切り、作品も出品しなかった。経済的な苦勞は並大抵ではなかったように、金山夫妻を知る人たちは、らくあ

づくと、早くから準備を終わって試験前数日間にはひたすら睡眠をとられ、試験場における頭脳活動の余裕をつくっておられた」と語っている。新聞では「多芸なる牧田女史」という見出しで「趣味すこぶる広く茶の湯、生花の外音楽にも堪能にして、語学は英独二国の語を習得し、目下師につきて仏語を修学中なり」と紹介している(『読売新聞』大正二年八月十六日)。

二 結婚

大学卒業後、一時京都の実家にもどっていた時、洋画家金山平三と見合いをした。金山平三は、一九〇四(明治三十七)年東京美術学校に入学、西洋画科を首席で卒業後、四年間フランスに留学、帰国後は文展で連続特選に輝いた新進気鋭の画家であった。見合い後お互いに好感を持ち交際を続けていたが、結婚することはなかなかできなかった。平三は居所も定まらず、収入も不安定な画家であり、妻が職をもつことによって自分が家庭の

つての金山平三と、夫人の献身を称えている。金山平三の年譜をたどってみると、夫人の動向がこれ程記載されている画家はいないのではないかとと思う。らく夫人と巡りあわなければ、金山の絵も生き方もまるで別なものになったであろう。

五 晩年

一九五六(昭和三十一年)日本橋高島屋で「金山平三画業五十年展」が開催され、画壇を離れて久しい平三の名が世間の注目を集めた。七十三歳にして初めての個展で二四〇点の作品のほとんどが未発表であった。ようやく穏やかな日々を迎えた夫妻は、一九六一年欧州へ写生旅行に出かけた。かつて仏語の数学書を読破したらくに、パリはどのように写ったであろうか。

平三の没後、らくは「私が主人の犠牲になつたと言つて下さる方がありますが、とてもございません。私は結婚とともに、私のすべてを主人のこやし(肥料)にしよう、そして主人とともに生きようと決心し、自ら選んだ喜びの道として、歩んで来たまでのことです。幸い、主人はああいう仕事をしてくれましたので、私はその中に充実して生きることが出来た、と満足しています。もちろん、後悔などは少しもございません」と述べている。らくは、平三の代表作「一三〇点を神戸の兵庫県立近代美術館に寄贈した。絵とともに神戸に住まいを移し、一九七七年この地で永眠した。八十八歳であった。」